

「夜と霧」を読んで

生きるということに対して、こんなにも考える機会は今までなかったように感じます。自分が何のために生きているのか、生きている目的はとも何なのか、考えてみると到底簡単には答えの出ない問でした。

本を読んで、極限まで追い詰められたときが、その人の人間力が試される時なのだと、改めて感じました。

困難に直面した時、これは悪い夢なのだとか、誰かのせいでこうなっているのだとか、誰かがどうにかしてくれるだろうとか、そんな風にいつまでも自分自身と向き合うことが出来なければ、いつまでも自分の価値は見いだせぬままですし、良い方向へ導かれることもないと思います。逃げることは簡単ですが、逃げて出た結果は、自分にとってなにもしなかったこととまったく同じ、もしくはそれ以下の結果しか生みません。

きっと誰だってより簡単で楽な方法で、この状況をどうにかしたいと思うことでしょう。しかし仮に、その困難を簡単な方法でどうにかすることができたとしても、それは乗り越えたのではなくやり過ごすことができただけで、そこに成長や価値は見出せないと思います。

自分にとって、辛かったり難しいと思う困難を本当の意味で乗り越えられたとき、自分が生きる意味や、そこに存在する価値、自分がその困難を与えられた意味を身を持って知ることができるのだと思いました。

また、乗り越えていくということにあたって、支えて下さる方々の存在も、欠かすことのできないとても大切なものだという事も感じました。

本の中に、さぼっていると思ひ込んだ監視兵が、叱責や棍棒での暴力で罵倒するのではなく、石ころを投げつけたといった家畜にすることと同等の行為が、感情が消滅していた著者にも多大なる苦痛を与えたというエピソードがありました。

周りの人に、自分と言う存在に関心すら持ってもらえなかったら、それこそ自分はなぜここにいるのだろう、なぜ生きているのだろうという絶望に繋がっていくと思います。そういった無関心こそが、人間にとって自分が生きていることを否定されるような、一番耐え難いことなのだと感じました。

私にとって、家族や、家族よりも長い時間を過ごすようになったリクロスの方々からの期待や愛情は、何にも変えがたいやる気を起こさせる大切な原動力となっています。そのような存在がいること、そう強く思えることが生きるということに強いパワーをもたらしていることを日々実感しています。

沢山の心に残る言葉がありましたが、その中でも特に印象に残った言葉が、「苦しむことはなにかをなしとげること」という言葉です。また、苦しみ、時に流す涙は、苦しむ勇気を持っている証だとも書いてありました。だれかが直面した苦しみをほかの誰かが受けることは出来ないですし、その人だからこそなしとげられる苦しみがあるのだと思います。

苦しくて辛く、涙したとしても、逃げずに立ち向かった後には、その人にしか分かり得ない何かが待っているのだと感じました。私がこれから直面するであろういくつもの困難も、私だから与えられたものなのだと、また、私にはたくさんの愛で支えて下さる方々がいるのだと、心を強く持っていたいと思いました。そして、同時に私も、私に関わってくださるすべての方にとって、原動力になるような存在でありたいと強く思いました。